

「茶屋蔵」の修復・活用整備による再生に向けた取り組み 港町・鞆における地域資源の発掘と利用を目的とした調査と実践 (その3)

鞆 地域資源	建築ストック 住民参加	リノベーション まちづくり	正会員	○内藤康介*	同	高見亮介**
			同	佐多祐一***	同	西村祐人****
			同	窪田亜矢*****	同	阿部大輔*****

1.はじめに

歴史的建造物が数多く現存し、多くの観光客も訪れる鞆の中心部の港湾沿いに、「茶屋蔵」と呼ばれる蔵が存在する。この蔵は江戸時代の旧福山藩御茶屋跡地に位置し、建物は築後 100 年ほど経過しているものと目されている。だが、つい最近までその存在は殆ど人に知られることなく、個人の倉庫として用いられているだけであった。

しかし近年、NPO 団体を中心に、空き家を商店として再生・活用するまちづくり活動が進められるようになり、この茶屋蔵を、地元の人々や観光客が共用できる、まちづくりの拠点として活用しようという動きが出始めた。

本稿は、東京大学大学院工学系研究科の都市工学・社会基盤学・建築学の三専攻からなる「鞆プロジェクト」チームを中心として、蔵の所有者と借用地者の協力のもと、この茶屋蔵の再生に向けて行ってきた調査・活動の報告と総括を目的としたものである。

2.茶屋蔵についての調査・研究

2-1.旧福山藩御茶屋についての研究

まず、茶屋蔵の歴史的背景を把握するため、2009 年 4 月から、かつてこの地に存在した福山藩御茶屋について調査・研究を行った。その結果、この土地は鞆を訪れる客人の接遇において非常に重要な役割を担っていたこと、その接遇には福山藩のみならず、鞆の寺社や有力商人なども一体となり対応していたことなどが明らかになった¹。

2-2.茶屋蔵の実測調査

史料調査と並行し、現在の茶屋蔵の建物と周辺の実測調査を行った。この調査から、茶屋蔵は江戸期のものを

はじめ、様々な古材を転用して建造されていること、後世に数々の手が加えられていることなどが判明した。

このため、茶屋蔵が建造された時期を明確にすることは極めて困難であり、この建物に文化財的価値を求めることも難しいといえる。しかし、この地がかつて饗応空間として栄えたこと、そしてこの蔵が長年にわたり、人の手を加えられながらも利用され続けてきたことは、この蔵をまちづくりの拠点となる公共空間として活用する上で、十分に大きな意義をもつと我々は考えた。

3.「ヨルトモ 2009」での一般公開

2009 年 9 月 12 日・13 日の二日間、鞆プロジェクトチームが主体となって行った観光社会実験「ヨルトモ 2009」において、茶屋蔵内部の一般公開と、研究成果の展示を行った。当日は鞆を訪れていた観光客のみならず、それまで茶屋蔵のことをほとんど知らなかったという地元の人々も数多く来場し、茶屋蔵の存在と実態を広く周知する恰好の機会となった。

4.修復・活用整備プロセス

4-1.応急処置工事

茶屋蔵の実測調査では、老朽化による数々の損傷も明らかになった。そのため、福山市から交付される、非文化財建造物を対象とした応急処置の助成金を受け、プロジェクトメンバーの設計監理のもと、2010 年 2 月から、地元業者の施工により応急処置工事が施された。この工事にあたっては、既存の構造物や遺構に過度の影響を与えないように、十分な配慮を行っている。

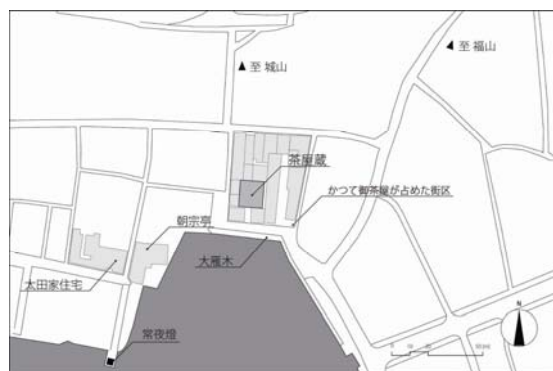


図 1. 茶屋蔵と周辺の歴史的建造物の位置

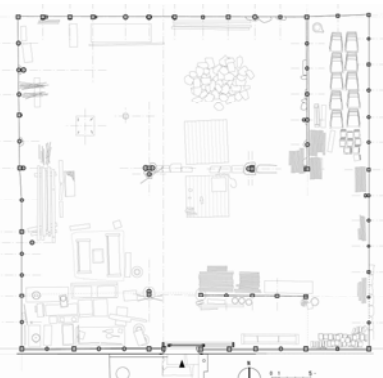


図 2. 茶屋蔵 2009 年実測平面図²

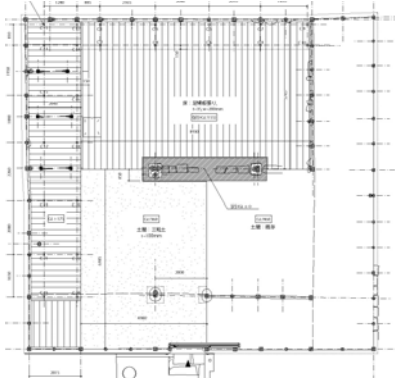


図 3. 茶屋蔵活用整備工事平面図²

4-2.活用整備工事

応急処置工事に続いて 2010 年 6 月から、茶屋蔵の恒常的な利用にむけた活用整備工事を行った。ここでは、蔵内に置かれていた物品を収納するための棚、集会などの活動のための床、常設の照明と電気配線の工事を行い、蔵内で一定の活動ができる最低限の程度の整備を行った。

4-3.活用整備ワークショップの開催

上記の活用整備工事に合わせて、茶屋蔵では数回のワークショップを開催した。これは、茶屋蔵の修復・活用整備プロセスに学生をはじめ、地元住民や観光客など、多様な主体を巻き込むことで、将来茶屋蔵が地域に開かれ、広く情報発信・交流の場として活用されていく可能性を高めることを目的としたものである。

第 1 回目のワークショップは 2010 年 7 月 17 日に、東京大学の学生と国立明石工業高等専門学校八木研究室の方々を参加者に、地元建設業者を講師として招いて行われた。当日は八木教授による住民参加型の保存修景についてのレクチャーの後、建設業者の指導のもと、蔵内部南側の土間の作製を行った。

第 2 回目は同 7 月 31 日、地元に住む子供やその家族、更には観光客に、茶屋蔵の二階回廊に設置される床板に絵を描いてもらうワークショップ「ともポン」を開催した。このワークショップは、後述の「ヨルトモ 2010」においても行われている。

これらのワークショップにより完成した土間や床板は、茶屋蔵の活用整備に多くの人たちが関わった証として、建物内にその形を残し続けていくこととなる。



図 4, 5. 活用整備ワークショップの様子

5.「ヨルトモ 2010」での公開・利用

こうしてある程度整備が済んだ茶屋蔵の更なる周知と、茶屋蔵および周辺の公共的利用の可能性を探るため、2010 年 9 月 11 日・12 日、「ヨルトモ 2010」を開催した。

当日は茶屋蔵内部の公開のほか、地元商店の協力による露店の出店や、オカリナや琴の演奏団体による茶屋蔵内部での演奏会なども行われ、茶屋蔵の公共的利用の可能性を実感させる催しとなった。

6.これまでのまとめ

これまで我々が度々重要視してきたのは、茶屋蔵の整備過程に我々学生や建設業者などの専門家は勿論、地元住民や観光客、地方自治体にいたるまで、多くの主体を巻き込み、まちづくりに繋げていこうという意識である。

こうした取り組みの結果、地元住民の間に茶屋蔵の認知は確実に広がり、観光客においても、ガイドに連れられて茶屋蔵の中を見学していく人が増えてきている。わずかながらでも着実に、茶屋蔵は公共的空間へと変化しつつあるといえよう。

表 1. 茶屋蔵の修復・活用整備プロセスとその参加主体

年	修復・活用整備プロセス	参加主体
2009	御茶屋・茶屋蔵調査	学生
↓	ヨルトモ 2009	学生、住民、観光客
2010	応急処置工事	学生、地元業者、市
↓	活用整備工事	学生、地元業者
↓	ワークショップ（土間）	学生、研究者、地元業者
↓	ワークショップ（床板）	住民、観光客
↓	ヨルトモ 2010	学生、住民、観光客、地元商店、音楽団体

7.今後の課題と展望

現在、茶屋蔵はある程度の活用整備が済み、一時的なイベントでの利用は度々なされているが、恒常的な活用に至るには、まだ幾つかの課題が存在している。

まず、今後茶屋蔵を公共的な施設として活用するのであれば、維持管理費や光熱費を捻出といった経営上の問題が避けられない。現在は蔵の所有者の方が光熱費を負担して下さっているが、いずれ何らかの経済活動により、それらを賄う必要があるだろう。

また、茶屋蔵の具体的な活用策がまだ固まっていないが、それを考えるためには、周辺の港などを含めた環境を一体的に考え、港周りが地元住民と観光客にとってどのような場所であるべきか、入念な検討が要求される。

加えて、それらを実現するためには、地元住民の手による、茶屋蔵活用の運営主体を立ち上げることも必要となるだろう。そして、活用の主導権はそちらに移し、我々はサポート側に回ることが望ましい。

こうした課題を乗り越えたとき、茶屋蔵は住民主体の建築再生として、一つのモデルケースとなることだろう。

¹ この研究の成果は、2010 年度日本建築学会大会学術講演会においても口頭発表を行った。（江下以知子、西村祐人、丁周磨「近世軀の浦の響応空間と港湾 - 福山藩御茶屋を中心に -」学術講演梗概集 F-2, 建築歴史・意匠 2010）

² 実測・作図・設計：西村祐人、丁周磨、佐多祐一

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 修士課程
** 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 修士課程
*** 株式会社設計領域 工修
**** 株式会社文化財保存計画協会 工修
***** 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 准教授・工博
***** 龍谷大学政策学部 准教授・工博

* Master's Course, Dept. of Architecture, Graduate School of Engineering, Univ. of Tokyo
** Master's Course, Dept. of Urban Engineering, Graduate School of Engineering, Univ. of Tokyo
*** Sekkei Ryouiki, Inc., M. Eng.
**** Japan Cultural Heritage Consultancy, Inc., M. Eng.
***** Assoc. Prof., Dept. of Urban Engineering, Graduate School of Engineering, Univ. of Tokyo, Dr. Eng.
***** Associate Professor, Faculty of Policy Science, Ryukoku University, Dr. Eng.